

「十字架につけられる」

2016年01月13日

ルカによる福音書 23章 26節～33節。人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。そのとき、人々は山に向かっては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、／丘に向かっては、／『我々を覆ってくれ』と言い始める。『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。

主イエスは、ローマの総督ピラトから死刑判決を出され、執行されることになった。ピラトの官邸から十字架を負わされ、刑場のゴルゴタ（されこうべ）に向かった。途中、体力を消耗し切った主イエスは十字架の重みに耐えられず、倒れ込んでしまった。刑を執行するローマ兵は、その場にいたシモンというキレネ人に十字架を代わりに背負わせた。シモンはキレネに住む、散らされた（ディアスポラ）ユダヤ人であろう。過越祭の巡礼に来ていた彼は、たまたま通りかかり、ローマ兵から無理矢理に背負えと命じられた。憤懣やる方なかったが、拒否することができない。シモンに関して並行記事のマルコ福音書 15章 21節に「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が」とあり、パウロはローマ書 16章 13節に「主に結ばれている選ばれた者ルフォス、およびその母によろしく。彼女はわたしにとっても母なのです」と書いている。ルフォスはシモンの息子であり、ルフォスの母、即ちシモンの妻はパウロにとって母親のような存在であった。シモンは主イエスの十字架を背負わされ、理不尽な命令に怒り心頭であったが、その後、家族は皆、主イエスを信じる者になった。シモン一家は初代教会で、皆に知られた家族になったのである。強制された十字架が救いの恵みになったということになる。私たちの間で、避けたい苦勞を負わせられることを通して、主イエスの十字架の救いに与ることがある。私もそうである。負わされた十字架は負ってみよ、恵みに変わるという嬉しいメッセージである。

傷を受け、痛みを耐えて歩む主イエスと十字架を背負わされたシモンの後を、民衆と婦人たちが追った。ガリラヤで力強く人々を励まし生かした主イエスの変わり果てた無残な姿に涙しながら従った。その時、主イエスは振り向いて言われた。この言葉は難解であるが、おおよそ下記のような意味であろう。エルサレムの住人たちよ。私のために泣くな。エルサレム崩壊という悲劇が襲う。その時、自分と子どもたちのために泣け。子どもを持たなかった女性は逃げられ、幸いを得る。人は皆、避難所を求めて逃げまどう。「生の木」の私はこの苦難を受けているが、「枯れた木」のエルサレムの崩壊時は更に悲惨である。ルカ福音書の著者が書いたもので、エルサレムの不信仰を嘆く言葉と思われる。

主イエスと共に、二人の犯罪人が処刑されるために引かれていた。刑場の「されこうべ」に着くと、主イエスは十字架につけられた。犯罪人たちも、主イエスの右と左の十字架につけられた。これから、十字架刑の激痛が始まる。